



ぼんやり

さん

川崎ゆきお

一瞬、何もないことがある。頭の中が。

これは単にぼんやりとしているだけのことで、結構居心地がいい。何かが休んでいるためだろう。

その間、居眠ってるわけではないが、その逆に熱中しすぎると、ぼんやり状態に近いことが起こっている。一つのこと集中しすぎ、その周辺がぼんやりとしたものになっている。熱中すると他が見えなくなるようなことは日常的にもある。

「ぼんやりねえ。いいんじゃないかい。君は特に何もしていないのだから、一日中ぼんやりしているようなものなんだから」

「いやいや、ぼんやりする方が難しいよ。これはやろうと思っても、なかなか出来るものじゃない」

「ぼんやりなんて簡単じゃないか。君はぼんやりしすぎて、職を失ったんだからね。集中力が足りないからミスばかり犯していたんだ。そりゃ、首になるよ。使い物にならないんだから」

「いや、そう簡単には首にならないよ。自分から辞めたんだ」

「その理由はぼんやりにあるんだろ」

「だから、ぼんやりなんて、やろうとしても、出来るものじゃないから、作為的じゃない。サボっていたわけじゃないんだ」

「いやいや、そうじゃない。君はいつもぼんやりしているんだ。だから、ぼんやりがデフォルトなんだよ。気付いていないだけでね。普通の状態がそもそも君の場合、ぼんやりさんなんだ」

「さん付けはいらないと思うけど」

「そのメガネ、何ぼんやりしているって、学校でもよく注意されていたじゃないか。その先生の注意にも反応しないほど、ぼんやりしていたぜ」

「だって、メガネって、誰なの」

「君のことだよ」

「それは知ってるけど、僕の名前はメガネじゃないから、誰に向かって言っているのか、すぐには分からなかった。メガネかけてる人、他にもいるしね。あの先生、僕の名前、忘れたのだと思ったよ」

「君はいつもぼんやり状態なのだから、その状態で、さらにぼんやりがあるとすれば、それはもう眠ってるよ」

「だから、ぼんやりなんて、していないよ。部屋でぼんやり過ごしているように見えても、本当にボーとしているときなんて希だよ」

「じゃ、最近何をやってるの」

「色々なことを思い出したり、考えたり」

「何を」

「だから、あの町はどうなったのかなあ、とか、あの友達は今頃まだ仕事辞めなくて働いているかなあ、とか、三日前に食べた赤飯、あれは美味しかったなあとかだよ」

「だからそれを、ぼんやりしていると言ってるんだよ」

「そうじゃないよ。かなり集中しないと、思い出せないんだから」

「有為なことを考えなさいと、言ってる！」

「有為か」

「そうそう、そんなどうでもいいようなことを思い出すんじゃなく、今の状態を打開するようなことを考える」

「今の状態かあ」

「そうだよ。職を探さないと駄目だろ。将来どうするんだ」

「それが有為か」

「そうそう。未来に役立つことで動くんだ」

「それは知ってるけどねえ」

「だったら、ぼやぼやしないで、やるべき事があるだろ」

「それも分かってるけど、なかなか」

「なかなか、何？」

「まあ、適当でいいから、そのあたり。また就職するから」

「ぼんやりさんは流される。もっと自分を持つことだな」

「ありがとう」

「しかし」

「え、何かな」

「とって、君が熱中している姿は見たくないなあ。怖いような気がする」

「就活が熱中かい」

「それなりに真剣に考えるだろう」

「でも、熱中しなくても出来るよ」

「まあいい。それは」

「気になるなあ」

「やはり、いい」

「何が」

「君がぼんやりさんから変身した場合、もう僕とは友達ではいられないような気がする」

「はて」

「分からない？」

「うん」

「だから、いいんだ。気が付けば困るよ」

「あ、そう」

了